

第Ⅰ部 現代の課題

第1章

イントロダクション



・・・

“1810～1820年代に独立を達成した後、ラテンアメリカの国々は政治的な混乱に直面した。新たに発足した国をどのような形にしているのか。ほとんどの国は共和国として独立したが、王制を主張する人たちも少なくなかった。統治形態として連邦制をとるのか、単一国家制をとるのかも重要な争点になった。(中略)——国づくりの基本方針が定まらないまま、時には武力紛争も含む激しい対立が続き、およそ半世紀間続く「独立後の混乱期」に突入したのである。”

(本文第4節より)

〈第1章 屏写真〉

ブラジル・ペルナンブコ州オリンダのカーニバル

写真：アフロ

「ラテンアメリカ」とは どんなところか

本章では、これから現代ラテンアメリカ経済を学んでいくにあたって必要な基本的知識を整理している。まず「ラテンアメリカ」のほか、舞台となる地域概念の定義を行い、次にこの地域を構成している国々の概要を、基本的経済指標や社会指標を用いて示す。さらに、この地域の地理的特徴と経済史における基本的な時期区分をおさえることで、後の各章で学ぶ現代的諸事象を理解するための知的土台を読者が獲得していくことを本章のおもな目的とする。

●学習目標

- ・ラテンアメリカの地理について基本的な知識を身につける。
- ・ラテンアメリカ経済の基本的な時期区分を把握する。
- ・自分なりの「ラテンアメリカ経済史年表」をつくる。

●キーワード

地形 気流・海流 気候 先コロンブス期 植民地期 一次産品輸出経済期 輸入代替工業化期

1 ラテンアメリカの定義

あなたは「ラテンアメリカ」と聞いて、どのようなことを頭に思い描くだろうか。「陽気な人々」「太陽とビーチ」「サルサ(タコスにかけけるソース)」「サルサ(音楽)」「マチュピチュ」「ジャングル」「アコンカグア」「移民」「サッカー」「チェ・ゲバラ」「サンバ・カーニバル」「ストリート・チルドレン」「アマゾン」「麻薬戦争」「貧困」「治安の悪さ」「アボカド」「タンゴ」……、さまざまなイメージをもっていると思う。これらは、これまで筆者がラテンアメリカ地域研究の入門科目を担当してきたなかで、受講していた学生の皆さんが挙げてくれた「ラテンアメリカのイメージ」の例だが、このほかにももっとたくさんのイメージが出てくるかもしれない。ただし、こうしたイメージは、確実にラテンアメリカのどこかに存在するけれども、どれもそれひと言だけではラテンアメリカをとてと言い表せない。まずは現代ラテンアメリカ経済を学ぶにあたって、その舞台がどのようなところなのか、おおよそそのところを把握することから始めよう。

さて、ここまでラテンアメリカという地域名を何の説明もなしに使ってきたが、それはどのように定義できるだろうか。もっとも簡単に言うならば、それは南北アメリカのうち、米国（アメリカ合衆国）とカナダを除いた部分ということになるだろう。つまり、メキシコから南がすべてラテンアメリカの範ちゅうに入るということだ。

それではラテンアメリカを構成する国はいくつあって、それらはどのような国々なのだろうか。表1-1にその一覧表を掲げるので、まずはそれをながめてみることにしよう。また図1-1と図1-2で、それらの国々がどのような位置関係にあるのか、確認しておこう。

表1-1には、ラテンアメリカ諸国33カ国と、その基本的なデータが掲げられている。そのデータを見比べてみると、これらの諸国はまず①～②④と②⑤～③③に大別できることに気づくだろう。①～②④の国々は、ラテン語を起源とするスペイン語、ポルトガル語、フランス語が国内で広く使われている国々の植民地支配を受けた点で共通している。また、いくつかの例外はあるものの、1810～1820年代というかなり早い時期に政治的独立を達成したことも共通点として指摘できる。それ

表1-1 ラテンアメリカを構成する国々

国名	独立		国土面積(km ²) (2020年)	人口(万人) (2020年)
	いつ？	どこから？		
① アルゼンチン	1816	スペイン	2,736,690	4,537.7
② ボリビア	1825	スペイン	1,083,300	1,167.3
③ ブラジル	1822	ポルトガル	8,358,140	21,255.9
④ チリ	1818	スペイン	743,532	1,911.6
⑤ コロンビア	1821	スペイン	1,109,500	5,088.3
⑥ コスタリカ	1821	スペイン	51,060	509.4
⑦ キューバ	1902	スペイン	103,800	1,132.7
⑧ ドミニカ共和国	1844	ハイチ	48,310	1,084.8
⑨ エクアドル	1822	スペイン	248,360	1,764.3
⑩ エルサルバドル	1821	スペイン	20,720	648.6
⑪ グアテマラ	1821	スペイン	107,160	1,685.8
⑫ ハイチ	1804	フランス	27,560	1,140.3
⑬ ホンジュラス	1821	スペイン	111,890	990.5
⑭ メキシコ	1821	スペイン	1,943,950	12,893.3
⑮ ニカラグア	1821	スペイン	120,340	662.5
⑯ パナマ	1903	コロンビア	74,177	431.5
⑰ パラグアイ	1811	スペイン	397,300	713.3
⑱ ペルー	1824	スペイン	1,280,000	3,297.2
⑲ ウルグアイ	1828	ブラジル	175,020	347.3
⑳ ベネズエラ	1821	スペイン	882,050	2,843.6
㉑ アンティグア・バーブーダ	1981	イギリス	440	9.8
㉒ バハマ	1973	イギリス	10,010	39.3
㉓ バルバドス	1966	イギリス	430	28.7
㉔ ベリーズ	1981	イギリス	22,810	39.8
㉕ ドミニカ国	1978	イギリス	750	7.2
㉖ グレナダ	1974	イギリス	340	11.3
㉗ ガイアナ	1966	イギリス	196,850	78.7
㉘ ジャマイカ	1962	イギリス	10,830	296.1
㉙ セントクリストファー・ネビス	1983	イギリス	260	5.3
㉚ セントルシア	1979	イギリス	610	18.4
㉛ セントビンセントおよびグレナディン諸島	1979	イギリス	390	11.1
㉜ スリナム	1975	オランダ	156,000	58.7
㉝ トリニダード・トバゴ	1962	イギリス	5,130	139.9

(出所) 独立については大貫良夫ほか監修『新版 ラテンアメリカを知る事典』平凡社、2013年、479-623。国土面積および人口についてはWorld Development Indicators。

(注1) ⑤⑨⑳はコロンビア(グラン・コロンビア)として独立後、1830年に分裂した。

(注2) ⑥⑩⑪⑬⑮は1821年にグアテマラとして独立したが、同年メキシコに編入、1823年に中米諸州連合として分離、翌年制定された憲法で国号を中米連邦共和国としたが、1838年、現在の5カ国に分裂した。

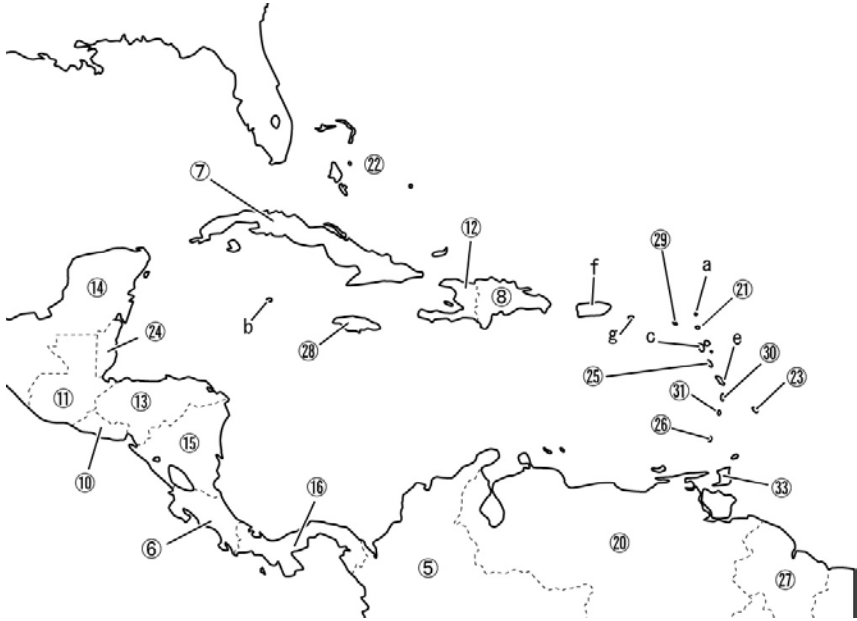
(注3) これら独立国33カ国のほか、非独立地域がある。そのおもなものは図1-1および図1-2に以下の記号で示してある。a: アンギラ(英), b: ケイマン諸島(英), c: グアドループ(仏), d: ギアナ(仏), e: マルティニーク(仏), f: プエルトリコ(米), g: ヴァージン諸島(英, 米)。

図1-1 ラテンアメリカ全図



(出所) 白地図専門店公開データを筆者加工。
(注) 地図内の丸数字および英小文字は、表1-1の番号に対応させてある。

図1-2 中米・カリブ地域拡大図(図1-1の青枠の範囲)



(出所)白地図専門店公開データを筆者加工。

(注)地図内の丸数字および英小文字は、表1-1の番号に対応させてある。

に対して②①～③③のカリブ諸国は、イギリスやオランダといったラテン系以外のヨーロッパ諸国の植民地支配を受け、また政治的独立を達成したのも1960年代以降とかなり最近のことである。

このような歴史的経緯を反映して、国連をはじめとする国際機関などでは、①～③③を合わせて指すときに「ラテンアメリカ・カリブ諸国」、そしてこれらの諸国全体が形作るエリアを指すときに「ラテンアメリカ・カリブ地域」と呼ぶことが一般的になった。たとえば、1948年に創設された経済社会理事会傘下の国連機関であるラテンアメリカ経済委員会は、多数のカリブ諸国が独立した後の1984年にラテンアメリカ・カリブ経済委員会と改称された¹⁾。その意味では、「ラテンアメ

1) 英語名称は、Economic Commission for Latin America (ECLA)、スペイン語名称は、Comisión Económica para América Latina (CEPAL) であったが、改称後はそれぞれ、Economic Commission for Latin America and the Caribbean, Comisión Económica para América Latina y el Caribe となった。略称は、前者はECLAC (エクラック) と変更されたが、後者はCEPAL (セパル) のままである。

リカ諸国」は①～⑳の国々のみを指し、㉑～㉓の国々はそれらが位置する海域にちなんで「カリブ諸国」とするのが適切であるようにも思われる。しかしながら本書では、紙幅の都合で「ラテンアメリカ・カリブ」全体を「ラテンアメリカ」と表記することにする。なお、日本政府は「ラテンアメリカ・カリブ」に相当する語として「中南米」を採用している²⁾。

最後に、この地域がなぜラテンアメリカと呼ばれるようになったのかについて付言しておこう³⁾。この用語は、19世紀半ばのフランスにまでその起源をさかのぼることができる。現在ラテンアメリカと呼ばれている地域のほとんどは、19世紀初頭にスペイン、ポルトガルから政治的独立を果たしたが、経済的には当時「世界の工場」と呼ばれていたイギリスが貿易や投資の面で大きな影響力を及ぼしていた。そこに割って入ろうとしたのがフランスである。1860年代、ナポレオン3世支配下のフランスによるメキシコ出兵は日本の高校世界史の教科書でも扱われているが、これはそうしたフランスの野心の表れの1つである。他方、現在ラテンアメリカと呼ばれている地域出身の知識人も、遊学や亡命の形でフランスに滞在していた。彼らにとっても「世界の文化の中心地」であるフランスと同じ範ちゅうに入る「ラテン」という形容詞は、心地よいものと響いたであろう。

現在私たちが使っている「ラテンアメリカ」という語の直接的な起源は、20世紀に入って政治的・経済的に絶大な力をもつに至った米国にある。米国の人々は自国のことを、本来アラスカからチリ・アルゼンチンに至る地域全体を指す言葉である「アメリカ (America)」と呼び、そこに住む自分たちのことを「アメリカ人 (Americans)」と呼んでいる。同国の政治指導者たちは、メキシコ以南の地域のことを、「アメリカ」の領分だが自分たち (=アングロサクソン) とは異なる、すなわち自分たちよりも「劣った」存在で、自分たちが指導していくべき「ラテン」

2) 本文で示した以外のおもな地域呼称として「イベロアメリカ (Iberoamérica)」と「イスパノアメリカ (Hispanoamérica)」がある。前者は、イベリア半島にあるスペインおよびポルトガルを旧宗主国とするアメリカ諸国のことで、厳密には狭義のラテンアメリカからハイチを除いたものとなるが、実際にはラテンアメリカと同義で使われることが多い。もう1つの事例としては、1991年に創設され、おおむね2年ごとに開催されているイベロアメリカ・サミットがある。これは、米州側のイベロアメリカ諸国と、ヨーロッパ側のスペイン語・ポルトガル語使用国であるスペイン、ポルトガル、アンドラを加えた22カ国の首脳会議である。他方、イスパノアメリカは、スペインを旧宗主国とするアメリカ諸国のことであり、イベロアメリカからブラジルを除いたものと定義することができる。

3) この点については、この地域を指す他の名称とともに、安村(2021)が明快に解説している。

な「アメリカ」、と呼ばうとしたのである。

19世紀のフランスと20世紀の米国で命名された「ラテンアメリカ」という地名は、このように多分に政治的な意味を付与された名称だった。わが国におけるラテンアメリカ研究者は、このような複雑な歴史的経緯を意識してか、アメリカ合衆国のことは「アメリカ」ではなく、「米国」と表記することが多い。本書でもアメリカ合衆国を米国と表記している。

2 基礎指標をどのように読むか

さて、次に表1-2を見てみよう。この表にはラテンアメリカ諸国それぞれの基礎指標が掲げられている。また、ラテンアメリカ諸国が世界のなかで相対的にどのような位置づけにあるのかを把握できるように、日本とスペイン、ポルトガル、そして主要なアジア諸国の数値も掲げておいた。

この数値を見ていくのに先立って、ラテンアメリカ地域の国のなかから、どの国でも、またどのような基準でもよいので、2つの国を選んで、その「自分の2国」を軸に表を見ていくことをおすすめしたい。ラテンアメリカ地域は言語的・歴史的共通点を有するものの、地勢・気候・植生・居住する人々・文化など、さまざまな面で大きな多様性を有する世界でもある。表1-2の指標を読み取っていくなかで、また本書を通じてラテンアメリカ経済を学んでいくにあたって、「自分の2国」が他のラテンアメリカ諸国とどのように同じで、どのように異なっているのかを意識することで、この世界の共通性と多様性を具体的な姿で感得することができるようになるだろう。

表1-1で見た、国土面積と人口についてはとくに説明は不要だろう。他方、表1-2の指標については、それらを見ていくにあたって若干の注意を要する。以下、簡単にその概要を説明するが、これらの指標は本章に続く各章でもたびたび用いられることになるので、その導入にもなれればと考えている。

1つの国の経済規模は、どのように計測することができるのだろうか。いくつかの指標が用いられているが、表1-2ではそのうち代表的なものの1つである国内総生産（英語名称のGross Domestic Productの頭文字をとってGDPと呼ぶこともあ

る)を使っている。これは、その国の内部で一定期間(ふつうは1年間)に生産された付加価値(value added)の総額と定義されている。付加価値とは、大まかに言えば、ある人が生産した製品の売上額から原材料費や燃料費を差し引いた額である。ある1国内で生産活動を行っている人が産出した付加価値を足し合わせたものがGDPだから、一般的に人口が多い国の方がGDPも大きくなる傾向がある。その国に住む人たちがどの程度豊かな暮らしができているのかを測るには、それを総人口で割って「1人当たり(per capita)」の値を求めるのが第一歩である。その値は、その国の住民の「豊かさ」の平均値ということができる。

しかし、この指標だけでその国に住む人々1人ひとりがどのくらい豊かかわかるわけではない。それには大きく分けて2つの理由がある。

まず、1人当たりGDPが表すことができるのが金銭的な豊かさだけだからである。もちろん、お金を多くもっていた方が、よい教育を受けられたり、より健康的な生活ができたり、その結果として長生きができたりする可能性が高いだろう。しかし、生活の質は金銭的な所得水準だけで決まるわけではない。高い所得はそうした質を獲得するチャンスは増やすが、質の高い生活という結果に所得の高さがストレートに結びつくとは限らないということである。その結果の一部を示すために、表1-2には例として成人識字率と平均寿命を示している。こうした指標はまとめて社会指標と呼ばれることもある。

1人当たりGDPが住民1人ひとりの豊かさを示すことができないもう1つの理由は、それが平均値にすぎないからである。それぞれの国のなかには、あり余るほどの所得を得ている人もいれば、その日その日をつましく生活している人もいる。こうした所得分配の状況を示すことができれば、その国のなかにどのくらい豊かな人がいて、どのくらいの人が貧困にあえいでいるのかを知るきっかけになる。これにもさまざまな指標があるのだが、表1-2では「所得不平等度(所得上位20%の所得/所得下位20%の所得)」を示している。この数値が大きいほど、その国における所得格差が大きいということができる。

この節の最後に、1点だけ付け加えたい。それは、数値が何年にとられたものなのかをつねに意識しながら読んでいく必要があるということである。そのなかには、たとえば国土面積のようにそう簡単には変化しなさそうなものもあるが、逆に人口のように時々刻々と動いているものもある。また、日本の常識では大きく

表1-2 ラテンアメリカ諸国基礎指標(2018年)

国名	国内総生産	同 1 人当たり	成人識字率	平均寿命	所得不平等度
	(100万米ドル)	(米ドル)	(%)	(年)	(倍)
① アルゼンチン	517,626.7	11,633.5	99.0	76.5	9.3
② ボリビア	40,287.6	3,548.6	n.a.	71.2	10.6
③ ブラジル	1,916,947.0	9,151.4	93.2	75.7	18.8
④ チリ	297,571.7	15,888.1	96.4*	80.0	8.8*
⑤ コロンビア	334,198.2	6,729.6	95.1	77.1	13.9
⑥ コスタリカ	62,335.9	12,468.6	97.9	80.1	12.4
⑦ キューバ	100,050.0	8,824.2	n.a.	78.7	n.a.
⑧ ドミニカ共和国	85,555.4	8,050.6	93.8**	73.9	8.6
⑨ エクアドル	107,562.0	6,295.9	92.8*	76.8	11.1
⑩ エルサルバドル	26,020.9	4,052.6	89.0	73.1	7.3
⑪ グアテマラ	73,208.6	4,478.4	80.8	74.1	n.a.
⑫ ハイチ	15,965.7	1,435.4	61.7**	63.3*	n.a.
⑬ ホンジュラス	24,067.8	2,510.3	87.2	75.1	15.6
⑭ メキシコ	1,222,348.8	9,686.5	95.4	75.0	9.5
⑮ ニカラグア	13,025.2	2,014.6	n.a.	74.3	n.a.
⑯ パナマ	64,928.3	15,544.7	95.4	78.3	14.9
⑰ パラグアイ	40,225.4	5,782.8	94.0	74.1	10.7
⑱ ペルー	222,574.7	6,957.8	94.4	76.5	9.6
⑲ ウルグアイ	64,515.0	18,703.9	98.7	77.8	7.8
⑳ ベネズエラ	n.a.	n.a.	97.7**	72.2*	n.a.
㉑ アンティグア・バーブーダ	1,605.4	16,673.4	n.a.	76.9	n.a.
㉒ バハマ	13,022.1	33,767.9	n.a.	73.8	n.a.
㉓ バルバドス	5,086.5	17,745.3	n.a.	79.1	n.a.
㉔ ベリーズ	1,915.9	5,001.4	n.a.	74.5	n.a.
㉕ ドミニカ国	551.1	7,693.8	n.a.	n.a.	n.a.
㉖ グレナダ	11,686.7	10,486.4	n.a.	72.4	n.a.
㉗ ガイアナ	4,787.6	6,145.8	n.a.	69.8	n.a.
㉘ ジャマイカ	15,730.8	5,360.0	n.a.	74.4	n.a.
㉙ セントクリストファー・ネビス	1,010.8	19,276.5	n.a.	n.a.	n.a.
㉚ セントルシア	2,065.9	11,357.8	n.a.	76.1	17.9**
㉛ セントビンセントおよびグレナ ディン諸島	811.3	7,361.4	n.a.	72.4	n.a.
㉜ スリナム	3,996.2	6,938.1	94.4	71.6	n.a.
㉝ トリニダード・トバゴ	23,679.9	17,037.9	n.a.	73.4	n.a.
スペイン	1,420,300.2	30,349.8	98.4	83.4	6.6
ポルトガル	242,194.8	23,551.0	96.1	81.3	5.6
日本	5,036,891.7	39,808.2	n.a.	84.1	n.a.
中国	13,894,817.5	9,976.7	96.8	76.7	7.0**
韓国	1,724,845.6	33,422.9	n.a.	82.6	5.2**
インド	2,701,111.8	1,996.9	74.4	69.4	n.a.

(出所) World Development Indicators.

(注) *印は2017年, **印は2016年の値。n.a.はデータなし。

変化するとは思われない、たとえば成人識字率や初等教育就学率などの数値も、ラテンアメリカ諸国においてはここ20～30年の間に大きく上昇している。直近のデータを見るだけでなく、過去のデータと比較することで見えてくることもあるのだ。

3

ラテンアメリカ・カリブ地域の多様性 ——地勢と気候——

前節では国ごとのデータをおもに見てきたが、本節ではラテンアメリカ地域の自然環境を大きな枠組みから見ていくことにしよう。自然は、国境線に規定されることなく、もともとそこに存在するものだからである。

図1-3は、ラテンアメリカ地域とその周辺の地形図である。アメリカ大陸は、北極圏から南極圏まで幅広い緯度にわたっており、寒帯から熱帯まであらゆる気候が展開しているのが特徴である。北アメリカ大陸も南アメリカ大陸も、元をたどればパンゲア（およそ3億年前から存在していたとされる超大陸）を構成していた古い大地であり、とくに南米大陸は東側のかなりの部分をこうした安定した陸塊が占め、起伏の緩やかな平原が広がっている。逆に大陸の西側と中米地峡は、日本列島と同様、陸地側のプレートに海洋プレートが沈み込む形で造山帯を形成しており、地殻活動が活発である。火山の噴火や地震・津波などの自然災害に見舞われることも珍しくない。また、標高ゼロメートルの海岸部から7000メートル近い高峰までを擁しており、人間の活動範囲は標高5000メートル前後にまで及んでいる。地形が急峻であるということは、狭い範囲にさまざまな気候帯が存在していることを意味し、古くから人類はそのような気候的多様性を活用し、命をつないできたのである⁴⁾。

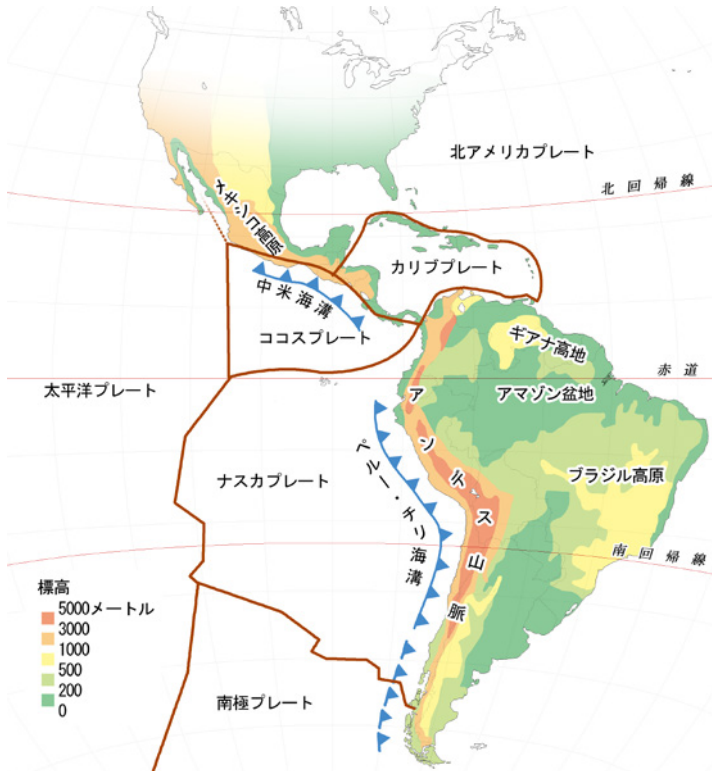
この地図に気流と海流を重ねてみよう（図1-4）。地球の自転の影響で、気流も海流も北半球では時計回りに、南半球では反時計回りに、大きな円環を描きつ

4) 高橋、網野（2009, 105-113）は、先スペイン期の中央アンデスにおいて、さまざまな標高に位置し、異なる気候を有する複数の土地を1つの共同体がパッチワーク状に用い、それぞれの土地が産する多様な作物を利用していった様子を、米国の歴史人類学者ムーラの提起した「垂直統御」という概念を援用しつつ具体的に、かつわかりやすく説明している。

動いている。したがって南北アメリカの東海岸では赤道から南極・北極に向けて暖流が恒常的に流れることになる。このことから、メキシコから中米にかけてのカリブ海側と南米大陸の東海岸では、標高が低いこととも相まって、同じ緯度帯のなかでは相対的に気温が高く、雨が多い気候となる。赤道付近では熱帯雨林が形成されているほか、高緯度地域まで人間にとって住みやすい環境となっている。

逆に太平洋側では、南極・北極の方から赤道に向かって寒流が流れている。海水温が低いことから蒸発量が少ないので、雨を降らせるような雲ができにくい。これと相まって、赤道付近で上昇した気流が降りてくる南緯・北緯それぞれ30度付近（中緯度高圧帯）では、海岸砂漠が発達する。また低緯度地域では、気温が高す

図1-3 ラテンアメリカ地域の地形

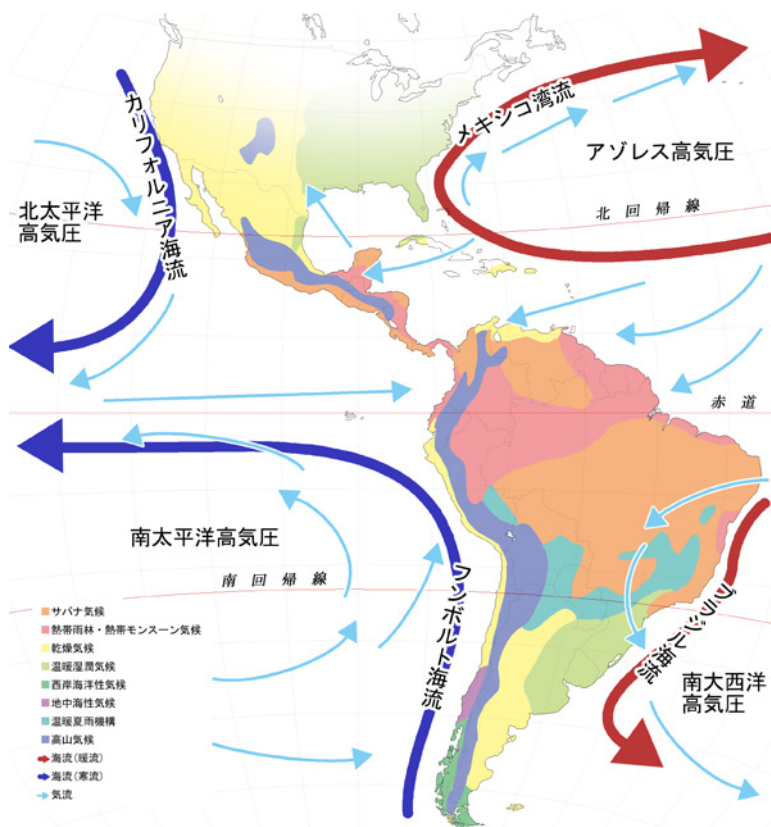


(出所)小池洋一ほか編著 1999.『図説ラテンアメリカ——開発の軌跡と展望』日本評論社 11-12, および都城秋穂ほか 1992.『アメリカ大陸の誕生』赤澤 威ほか編『アメリカ大陸の自然誌』第1巻, 岩波書店 62 を参考に, CraftMAP公開データを筆者加工。

ぎることも低すぎることもない標高2000～3000メートルほどの高原地帯に人口が集中する。たとえば、周辺部まで含めると3000万人近い人口を擁するメキシコの首都メキシコ市は標高2300メートル余り、ボリビアの首都であるラ・パス市（人口は周辺部を含め約200万人）は同3600メートルのところにある。

図1-4には、大まかではあるが、ケッペンの気候区分も重ねてある。高校時代に暗記しようとして憂うつな気分になった人もいるかもしれないが、このように意味を理解した上で考えてみると、気候分布は把握しやすくなるだろう。また、先に決めてもらった「自分の2国」の地形や気候がどのような構成になっているか、

図1-4 ラテンアメリカ周辺の海流・気団と気候区分



(出所) 小池洋一ほか編著 1999. 『図説ラテンアメリカ——開発の軌跡と展望』日本評論社 13-14, および都城秋穂ほか 1992. 『アメリカ大陸の誕生』赤澤 威ほか編『アメリカ大陸の自然誌』第1巻, 岩波書店 65 を参考に, CraftMAP公開データを筆者加工。

主要都市がどのような配置になっているか、どのような植生や農産物・鉱産物の分布が見られるかなどを調べ⁵⁾、ネットから無料でダウンロードできる白地図データなどに描き込んでみると、より実感をもってこの地域の地理的特徴を理解することができるだろう。

4 ラテンアメリカ経済の時期区分

前節までは、ラテンアメリカ地域の地理的な広がりをおもに見てきたが、本節では時間的な広がりを目を転ずることにしよう。

アメリカ大陸に人類が到達したのは、今からおよそ2万年前ごろと言われている。この頃は気候が寒冷で「最終氷期」と呼ばれているが、地球上の水の一定部分が氷床という形で固定されていたので、海水面が現在よりも100メートルほど低くなっていた。これによりシベリアとアラスカの間（現在のベーリング海峡）の海底面が露出していたわけだが、この狭い陸地（「ベリンジア」と呼ばれる）を通して、人類は知らず知らずのうちにアメリカ大陸に足を踏み入れたと考えられる。そうした「最初のアメリカ人」は、遅くとも1万1000年前ごろまでには南米大陸の南部にまで達していたという。

それ以来、1492年にコロンブスの一行がカリブ海域に現れるまで、現在のラテンアメリカ地域に住んでいた人々は、それ以外の地域の人類とは無関係のまま、さまざまな環境のさまざまな場所で生活を営み、独自の文化を花開かせていったのであった。ラテンアメリカ史では、この時期のことを「先コロンブス期」と呼んでいる。コロンブスは現在のイタリア・ジェノヴァの人と言われているが、現在のスペインにつながるカスティーリャ王国との契約のもと探検・征服を行っていったので、その占領地はスペイン王の領土ということになった。このことから、とくにスペイン語圏では「先スペイン期」という語もよく用いられている。1500年にはポルトガル人カブラルが現在のブラジル北東部に上陸したことから、ポル

5) 読者が高校時代までに学校で使っていた地図帳や、電子辞書に収録されている百科事典は思いのほか役に立つので、ぜひ活用してほしい。また、オンライン情報源については、章末のリストを参照されたい。

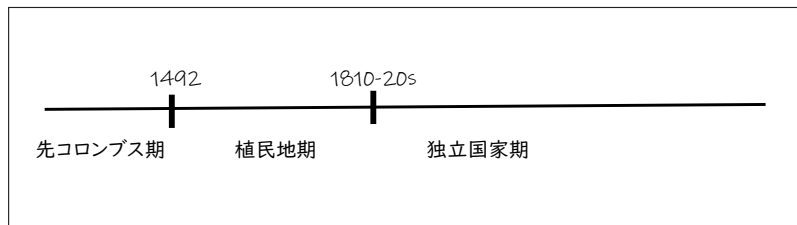
トガルも南米大陸に植民地を有することとなった。

表1-1で確認したように、ラテンアメリカ諸国の多くは1810～1820年代にスペインないしポルトガルから政治的独立を達成した。ラテンアメリカ史では、ヨーロッパ人による征服が始まってから、この1810～20年代までのおよそ300年間を「植民地期」あるいは「植民地時代」と呼んでいる。独立後の時期については、ラテンアメリカ史全体で統一的な呼称はないが、ここでは「独立国家期」と呼んでおくことにする。以上3つの時期を年表風に表現してみると、図1-5のようになるだろう。

この後、いろいろな事項を書き足して「私のラテンアメリカ経済史年表」を作りあげていけるように、そして何枚もの紙をひっくり返さなくてもそれを一望のもとにながめられるように、大きめの紙に図1-5を描き写しておこう⁶⁾。時間的スケールを意識するならば、「先コロンブス期／先スペイン期」が大きなスペースを占めることになるだろうが、資料の豊富さを考えると、また本書がおもに現代ラテンアメリカ経済を対象としていることを考え合わせると、「独立国家期」に余裕を持たせておく方がいいかもしれない。いずれにせよ、工夫を重ね、何度も描き直すこともよしとしつつ、「私のラテンアメリカ経済史年表」の作成に着手することにしよう。

さて、「独立国家期」のラテンアメリカ経済史をもう少し細かく時期区分しておこう。

図1-5 私のラテンアメリカ経済史年表(雛形)



(出所)筆者作成。

6) 読者が個別に作業をすることを想定してこのような提案を行っているが、エクセルやオンラインホワイトボードなどデジタル媒体を活用し、授業内外でのグループワークを通じ共同制作を試みるなど、さまざまな展開も考えられるだろう。

独立後の混乱期	～ 1870年頃
一次産品輸出経済期	1870年頃～ 1930年頃
輸入代替工業化期	1930年頃～ 1982年
新自由主義改革期	1982年～

1810～1820年代に独立を達成した後、ラテンアメリカの国々は政治的な混乱に直面した。新たに発足した国をどのような形にしていくのか。ほとんどの国は共和国として独立したが、王制を主張する人たちも少なくなかった。統治形態として連邦制をとるのか、単一国家制をとるのかも重要な争点になった。それ以上に、こうした政治的対立を口実にライバルを蹴落とそうとする権力闘争も渦巻いた。国づくりの基本方針が定まらないまま、時には武力紛争も含む激しい対立が続き、およそ半世紀間続く「独立後の混乱期」に突入したのである。

各国の国内政治が安定しはじめたのは、19世紀も後半に入ってからである。その頃になると、18世紀後半にイギリスで始まった産業革命が、広くヨーロッパ諸国に波及・本格化し、ラテンアメリカ諸国に豊富に賦存する一次産品、すなわち鉱物資源や農牧産品などの工業原材料や安価な食料に対する需要が増大した。また鉄道や蒸気船、さらには冷凍・冷蔵設備などの新技術が普及すると、輸送費の高さゆえに輸出できなかった産品も輸出できるようになっていく。ラテンアメリカ経済史では、おおむね1870年頃から1930年頃まで続くこの時代を「**一次産品輸出経済期**」と呼んでいる。小麦・トウモロコシや牛肉・羊毛などを、とくにイギリスへ大量に輸出することでこの時期に最も繁栄したアルゼンチンでは、1人当たり所得が旧宗主国スペインをしのぎ、フランスに匹敵するまでに至っていた。

一次産品輸出経済期は、1930年代の世界的な大不況（世界大恐慌）で終わりを告げる。ヨーロッパ諸国での工業生産が大きく減少したことで一次産品への需要も激減した。世界大恐慌が誘発した経済のブロック化の影響もあり、ラテンアメリカ諸国は輸出量の減少のみならず、需要減が引き起こした価格低下とで二重の打撃を受けた。輸出額が大幅に収縮したことで、それまで欧米諸国からの輸入に頼っていた工業製品が調達できなくなり、ラテンアメリカのなかでも比較的規模の大きな国——アルゼンチン、ブラジル、メキシコなど——では、国内で工業製品を生産していくことになった。この過程は「それまで輸入に頼っていた製品を

国産品で代替するための工業化」という意味で「輸入代替工業化」と呼ばれる。ラテンアメリカ諸国は、とくに第二次世界大戦後、これを開発戦略の主軸と位置づけて経済運営を行っていった。1982年までのおよそ半世紀を「輸入代替工業化期」と呼んでいる。「一次産品輸出経済期」と「輸入代替工業化期」については経済史（第14章）で、また、その後の「新自由主義改革期」については新自由主義（第15章）で、それぞれその思想的背景を検討する。とくに後者は、私たちが生きている時代そのものであり、本章に続く各章において、さまざまな形で検討の対象とされている。

●学習の課題

振り返ってみよう この章の第3節では、ラテンアメリカ地域の地理的特徴を学んだが、任意に選んだ「自分の2国」の位置を図1-1で確認し、その位置を図1-2～1-3に当てはめることで、それぞれの国がどのような地形的・気候的特徴を有しているか考えてみよう。また、電子辞書に収録されている百科事典などで「自分の2国」に関する記事を読み、その地理的特徴を確認するとともに、それらの国の大まかな歴史についてもおさえよう。

議論してみよう 表1-2には、ラテンアメリカ諸国の基礎指標が示されているが、これらの諸国を何らかの基準を設けてグループ分けしようとするならば、どのような区分ができるだろうか。自分なりの基準で仮説的にグループ分けをしてみよう。そして、それがどの程度、どのような意味において妥当なものなのか、議論してみよう。

調べてみよう 百科事典などで、任意に選んだ「自分の2国」の歴史上、重要だと思われる事象にはどのようなものがあるか抜き出し、それらを「自分のラテンアメリカ経済史年表」に書き込んでみよう。その上で、それらの事象を世界史の大きな流れのなかに位置づけたり、また同時期に起こった日本史上の大きな出来事と比較してみた場合に、どのようなことが言えるか考えてみよう。

◎さらに学ぶための参考文献

青山和夫・米延仁志・坂井 正人・鈴木 紀編 2019.『古代アメリカの比較文明論——メソアメリカとアンデスの過去から現代まで』京都大学学術出版会。

ラテンアメリカ地域を研究するにあたっては、先住民の存在を無視することはいかない。その先住民は、決してマヤ・アステカ・インカといった、いわゆる「古代

文明」の担い手というだけではない。先コロンブス期から現代に至るまでの先住民や彼らが築き、また保持している文明や文化について、本書はその研究に従事しているわが国の研究者が結集して編まれた好著である。

山本紀夫 2021.『高地文明——「もう一つの四大文明」の発見』中公新書。

本章第3節で見たように、ラテンアメリカ地域の1つの大きな特徴は、標高2000メートルを超えるような高地帯に古くから文明が栄え、現代でも大都市がいくつも数えられることである。人類の主食と考えられているコメや麦といった穀物類が育たない中部アンデス高地で、なぜ高度な文明が早い時期に花開いたのかは、長年の謎とされてきた。本書はその所以を旧大陸で発展した古代文明の論理をそのまま新大陸の文明にあてはめようとしたためであると論ずる。ラテンアメリカ地域の地理的特殊性を感得するのに一読をすすめたい。

Bulmer-Thomas, Victor 2014. *The Economic History of Latin America since Independence*, 3rd. ed., Cambridge: Cambridge University Press.

ラテンアメリカ経済史を学ぶにあたって現在手にすることのできる最も包括的な基本書。いわゆる域内大国だけでなく、中米・カリブ地域の比較的規模の小さな国々にも目配りが行き届いている点も本書の特長である。第1版からの邦訳（田中高・榎股一索・鶴田利恵訳 1999.『ラテンアメリカ経済史——独立から現代まで』名古屋大学出版会）もある。

〔引用文献〕

〈日本語文献〉

- 大貫良夫・落合一泰・国本伊代・恒川恵市・松下 洋・福嶋正徳監修 2013.『新版 ラテンアメリカを知る事典』平凡社。
- 小池洋一・坂口安紀・三田千代子・遅野井茂雄・小坂允雄・福島義和編著 1999.『図説ラテンアメリカ——開発の軌跡と展望』日本評論社。
- 高橋均・網野徹哉 2009.『ラテンアメリカ文明の興亡』『世界の歴史』第18巻，中央公論新社。
- 都城秋穂・米倉伸之・鈴木秀夫・棚井敏雅・富田幸光・阪口 豊 1992.『アメリカ大陸の誕生』赤澤 威ほか編「アメリカ大陸の自然誌」第1巻，岩波書店。
- 安村直己 2021.「ラテンアメリカ・イベロアメリカ・イスパノアメリカ」ラテンアメリカ文化事典編集委員会編『ラテンアメリカ文化事典』丸善出版，8-9。

・白地図データ

CraftMAP <http://www.craftmap.box-i.net/>

白地図専門店 <https://www.freemap.jp/>

※各ウェブサイトの利用規約や著作権表示についてのルールをよく読んで順守すること。

- ・ラテンアメリカ地域各国基本情報に関するオンライン情報源

〈各国概要〉

- ・外務省「地域別インデックス（中南米）」

<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/latinamerica.html>

〈農産物・鉱産物・主要産業の概要〉

- ・独立行政法人日本貿易振興機構（ジェトロ）「中南米——ビジネス情報と支援サービス」

https://www.jetro.go.jp/world/cs_america/

〈とくに鉱物資源に関する情報〉

- ・独立行政法人エネルギー・金属鉱物資源機構（JOGMEC）

<https://www.jogmec.go.jp/index.html>

※ラテンアメリカ地域に特化したページはないので、トップページで「中南米」や特定の国名で検索をかけるとよい。

（谷 洋之）

©IDE-JETRO 2024

本書は「クリエイティブ・コモンズ・ライセンス表示4.0国際」の下で提供されています。

<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

